

懐 疑, 科 学, 哲 学

吉 沢 昌 恭

I 懐疑のすすめ

人がある意見を抱いており、しかも、その意見に合理的な根拠がある場合、彼は決してその意見を熱情的に抱くことはない。もし、彼がその意見を信ずる根拠を求められたなら、彼は、直ちに、その根拠を説明するであろうし、また、そのことが効果をあげるのを待つであろう。それに反して、十分な根拠のない意見は熱情的に提唱されることになりがちである。

ラッセルは、「ある命題について、それが真理だと思ふ何の根拠もない場合、その命題を信じることは好ましくない」という提言を行っている。つまり、懐疑主義のすすめである。しかしながら、彼の提唱する懐疑主義は決して極端なものではない。ピロニズムの始祖ピロンは、ある傾向の行為が他の傾向の行為よりも優れていると確信できるほど十分な知識は我々人間にはない、と主張していた。ある日彼が散歩していると、彼の哲学の先生が溝にまっさかさまに落ち込んで、出られないでもがいていた。彼はしばらく先生を見守っていたが、この老人を溝から救い出しても何か役に立つことをしたことになると思える十分な根拠がないと信じて、立去ってしまった。彼ほど懐疑的でない人達は、その老人を救い出して、ピロンの無情を非難した。だがピロンに懐疑主義を教えたその老人は、自身の主義を忠実に守って、ピロンの言行一致をほめたたえたというのである。

ラッセルの説く懐疑主義はこれほど極端なものではない。彼は、理論上

* 本稿を作成するに当り、本学祢宜田久男教授より多くの有益な御助言をいただきました。ここに、感謝の意を表わしたいと思います。

はともかくとして、實際上、常識的な普通の信念は認めるつもりのあることを明らかにしている。つまり、科学上十分根拠のある結論は、確実な真理としてではなくとも、合理的な行為の基盤をもたらすのには不足のない蓋然的な真理として認めてもよい、というのである。彼の唱える懐疑主義は次の様に要約できる。

- (1) 専門家の意見が一致している場合は、これと反対の意見は確実だとみなすわけにはいかない。
- (2) 専門家の意見が一致しない場合は、専門家でないものは、どの意見も確実だとすることができない。
- (3) 専門家がこぞって、ある独断的な意見には十分な根拠がないと主張する場合は、普通の人は、自分の判断を差し控えた方が良い。

* * *

ラッセルの説く懐疑主義とは、根拠に応じて信じる精神であり、また、科学的な精神であると言うことができるだろう。それでは科学とは何だろうか。これに答えることは容易なことではない。また、これこそが、彼が一生問い続けたものである。しかし、ここでは、科学とは何か、という間に直接答えることは断念して、ラッセルの科学観に一条の光を当てるということで止めておくことにしたい。そのためには、「宗教と科学の闘争」に関しての彼の見解を一瞥してみるのが有益であろう。

ラッセルは、社会現象としての宗教には三つの側面がある、と言う。つまり、教会、教義、個人道徳の掟がそれである。これら三つのものは、いずれもその比重に差はあっても、社会現象としての宗教に不可欠のものであり、そして、この社会現象こそ、科学との闘争に主な関わりを持つものである。教義こそが、宗教と科学の闘争の知的源泉であるが、教義が他の二つのものと結びつく時、対立は激しさを増す。それに対して、純粹に個人的な信仰は、科学が反駁し得る主張を避けるのをいとわない限り、科学が最も進歩した時代にも生き延び得るであろうし、それはラッセルも認め

るところである。

科学が戦わねばならなかった中世の思惟は論理的統一を一大特徴として
いる。そこでは、最も普遍的な原理が出发点となり、そこからあらゆる
ことが演繹された。それに対して、科学は、観察や実験によって発見され
た個々の事実から出発する。そのような多くの事実から一般的な法則が導
き出される。この法則は、最初は、操作上の仮説として受け入れられる。
もし、それが正しければ、従来観察されなかった一定の現象が一定の環境
下で起ることになる。もし、そうした現象が起らなければ、仮説は斥けら
れ、新しい仮説が考え出されねばならなくなる。しかし、他方、仮説に適
合するどんなに多くの事実が発見されたとしても、その仮説が真理である
蓋然性が高められるのみで、それが最終的に真理であるということは証明
されないのである。

宗教は永遠で絶対的に確実な真理の体现者である、と主張され続けてき
た。他方、科学は常に試験的であり、また、今日においては、絶対的真理
の探求を断念している。科学の先駆者達も、この最後の点を十分把握して
いなかった。しかし、そのことにふれる前に、まず、神学と科学の最も
注目すべき闘争の起った領域、即ち、天文学に目を向けてみることにしよ
う。

Ⅱ 科学v.s. ドグマ

紀元前三世紀に既に、サモスのアリストアルコスは次のような説を唱えて
いた。地球は自分の軸のまわりを回転するばかりか、太陽のまわりを軌道
を描いて回っており、空の運動のように見えるのは、地球のこうした運動
の結果に過ぎない、と。しかし、アレクサンドリアのプトレマイオスは、
130 年頃、アリストアルコスの見解を反駁し、地球を宇宙の中心の特権的地
位へと連れ戻したのである。彼は、地球が動くという可能性を真剣に検討
した。そして、当時彼の持っていた知識からすれば確かに道理にかなって
いると思われる論拠に基づいて、アリストアルコスの説を斥けたのである。

かくして、その後、古代と中世を通じて、彼の見解は疑惑にさらされることがなかった。

しかし、その後の天体観測は、プトレマイオスの体系を徐々に困難なものにしていった。天体の運動が次々に明らかにしてゆく不規則性を説明するために、益々多くの周転円がつけ加えられていった。そして、十五世紀の末には、この体系は極度に複雑なものになってしまった。そのことは、コペルニクス(1473～1543)の数学的精神には氣にくわないものであった。全てを完全に為し得る神がそんな不細工な宇宙を創るはずがないからである。そこで彼は地動説に立ち返ったのである。それによって、天体の運動をもっと簡単に説明できるはずであった。20年間の努力によって、彼は遂に一つの体系を完成させた。そして、それを『天体の回転について』の中で述べたのである。この著作は、1543年、彼の死の直前に発行された。

コペルニクスは、迫害を恐れて、生存中に著作を出版することをためらっていた、とよく言われる。このことが事実であるかどうか、若干意見が分れているようである。しかし、コペルニクスの死後、新・旧の両キリスト教徒がコペルニクス説を激しく論難したことは粉れもない事実である。それでは、神学者達は、コペルニクス説のいかなる点を問題視したのであろうか。コペルニクスの説は、地球を宇宙の中心的位置から退けることになる。それは、その住民をも宇宙の中心的位置から退けることを連想させる機縁になるであろう。我々の地球は太陽のまわりを回る惑星のひとつに過ぎず、また、その太陽系ですら、決して銀河系の中で特筆すべき存在ではない。そして銀河系のかたにはるかに広大な宇宙が広がっている。宇宙がかくも広大で、しかも、地球がその中心にない、ということに思いをはせるならば、伝統的神学によって認められてきた、「宇宙的意義を持つ人間」という観念を信じることは困難になる。我々人類は、多分、宇宙の目的ではないのだろう。もし、我々が宇宙の目的でないのなら、宇宙にはきっと目的がないのだ。こうしたささやきが聞かれるようになっていった。従って、キリスト教会が、プロテスタントもカトリックも、この新し

い天文学に敵意を感じ、それに異端の烙印を押す根拠を捜し求めたことは驚くにあたらない。

* * *

コペルニクスは円に固執していた。このことが、プトレマイオス説に優る彼の説の簡潔性のある程度損なっていた。この問題は、ケプラー（1571～1630）によって解決された。彼がコペルニクス説に加担するようになったのは、より合理的な動機に基づくと共に、太陽崇拜に基づくものであった。彼の研究は信じ難いほどの忍耐をもって進められた。彼の神秘的な信念がその忍耐の源であった。かくして彼は三つの法則に到達したのである。最初の二つの法則は1609年に、第三の法則は1619年に発表された。

第一法則：惑星は楕円軌道を描き、太陽はその焦点のひとつを占める。

ギリシア人は楕円についての多くの知識を持っており、その数学的性質を注意深く研究したが、天体が円や円の複雑化したもの以外の何らかの形で動き得る、という考えは彼らには浮ばなかった。彼らの審美的心情がその思弁を支配し、最も整合的な仮説以外は全て斥けられたからである。スコラ学者もギリシア人の偏向を受け継いだ。ケプラーによって、初めて、審美的原因による先入主が打ち破られたのである。

第二法則：惑星と太陽を結ぶ線は、等しい時間には等しい面積を覆う。

従って、惑星は太陽に最も近い時に最も速く運動し、太陽から最も遠い時に最も遅く運動する。これも奇妙なことであった。つまり、惑星は、ある時には、せかせかあわただしく運動せねばならず、他の時には、堂々としてあわてる必要がないのである。

第三法則：惑星の公転周期の自乗は、太陽からの平均距離の立方に比例する。

この法則は、太陽系に関する限り、重力についてのニュートンの逆自乗法則を証明したものである。

* * *

神学と天文学の闘争はいよいよクライマックスに近づいてくる。その主役がガリレオ（1564～1642）である。彼はミケランジェロの死ぬ三日前に生まれ、ニュートンの生まれた年に死んだ。

彼は天文学者として重要であると共に、動力学の創始者としても重要である。彼は、実験的、力学的技術と数学を結合させ、物体の運動を支配する法則の研究を開始した。まず第一に、ガリレオは、運動している物体は外的影響を全く受けなければ、まっすぐに等速で動き続けることを立証し、運動している物体はそのままに放っておくと止ってしまうだろう、というその当時まで信じられていた考え方に異議をさしはさんだ。また、10 kg の物体と 1 kg の物体が同時に同じ高さから落されたならば、1 kg の物体は地上に達するまでに 10 kg の物体の十倍の時間がかかる、といった説や、物体が弾丸のように水平に投げられた時、それは一定の間水平に動き、その後垂直に落下する、といった説も斥けられていった。これらの説はいずれもアリストテレスの権威に由来するものであった。ガリレオによって、次々とアリストテレスの誤謬の証拠が提示されていった。このことは、当然、彼に対するスコラ学者の憎悪を招来することとなった。

しかし、ガリレオを真に危険な状態に陥し入れたのは望遠鏡であった。ガリレオは望遠鏡を用いて、熱心に天体観測を行った。そして遂に、木星に四つの衛星のあることが発見された。木星と四つの衛星は小型の太陽型の模型として重要だった。それはコペルニクス説を有利にする発見であった。更にそれは、恒星以外に七つの天体（太陽、月、そして五つの惑星）

が存在すべきである, という従来の説をくつがえすものとなる。黙示録の金の燭台は七つではなかったか? アジアの教会は七つではなかったか? アリストテレス主義者は望遠鏡をのぞくことを全く拒否し, 木星の惑星は錯覚であると頑強に主張した。

神学者達を恐愕せしめた発見はそれだけに止らなかった。望遠鏡は, 金星が月と同じようにみちかけすることを示した。また, 月に山や谷のあることが発見された。しかし, 何よりも恐しいことに, 太陽が黒点を持っていたのである。このことは, 創造主の業が欠点を持っていることを示しているように思われた。カトリックの諸大学の教師達は太陽の黒点を指摘することを禁じられた。神学者達は宣言した。幾何学は悪魔のものであり, 数学者は異端の創始者として追放されるべきである, と。

遂に, 宗教裁判が天文学に及んだ。異端審問所はおごそかに裁定を下した。

「太陽が中心であり, 地球のまわりを回るのはないという第一の命題は, 明らかに聖書に反するので, 馬鹿げており不合理であり, 神学上誤りであり, 異端である。……地球が中心でなく太陽のまわりを回るのでという第二の命題は, 不合理であり哲学上誤りである。そして, 少なくとも神学的な見地からの真の信仰に反する。」

ガリレオは, ここに到って, 法皇から宗教裁判に出頭することを命じられた。宗教裁判は彼にその誤謬を訂正することを命じ, 彼は1616年2月26日その命に従った。彼は, コペルニクス説に固執せず, また, それを書物でも言葉でも教えないことを誓わされたのである。間もなく, 法皇の求めにより, 地動説を説く全ての書物は禁書目録にのせられた。

しかし, ガリレオは生来楽天的な性格の持主であったし, 1623年, 彼の友人, バルベリニョ枢機卿がウルバヌス八世として法皇の地位に就いたことが彼に希望を与えた。彼は再びコペルニクス説への賛意を暗示する論文を公けにした。そして『世界についての二つの最大の体系に関する対話』(『天文対話』)を書き始めた。この書は1630年に完成され, 1632年に出版

された。それは、プトレマイオス説とコペルニクス説の間で論争が展開される、という形式で書かれているが、実際には、全体が後者のための強力な論証となっている。それは全ヨーロッパでむさぼるように読まれた。

神学者達との衝突はもはや回避不可能となっていた。彼らは互いに血潮を沸き立たせ、今や、病により衰弱し盲目になりつつある一人の老人を追求する準備を整えつつあった。ガリレオは、1633年に、再びローマに召喚され、宗教裁判に立たされた。それは、1616年の第一次裁判よりも苛酷なものであった。彼は完全に征服された。彼は、虚偽の誓約を余儀なくされたばかりか、もしも自分の異端説を支持する科学者を発見した場合自分はこれを異端審問所に告発する、と誓わされたのである。その後、彼は一切の行動を統制され、家族や友人に会うことも禁じられた。1638年に彼は盲になり、1642年に死んだ。この年はニュートンが生まれた年であった。

教会は、その統制下にあるあらゆる学術教育機関で、コペルニクス説を真理として教えることを禁じた。ガリレオに対する有罪宣告が、1757年にやっと、それもこっそりと取り消された。ガリレオの死後百年以上もたってからのことである。更に、地動説を説く著述は、実に1835年に到るまで、禁書目録にのせられていたのである。

Ⅲ 進化論とその意味

ガリレオは、力学と天文学を結合しようと試みていた。しかし、この仕事を最終的に成し遂げたのはニュートン（1642～1727）であった。彼は、コペルニクス、ケプラー、ガリレオらが用意した道をたどって、最後の完全な勝利に到達したのである。そして、その成果は『自然哲学の数学的原理』（1687）に記された。この著作は、科学者としてのニュートンの地位を確固不動のものとした。1662年に設立された世界最古の科学アカデミーたる王立協会でも、彼の著作は高く評価された。あらゆる物体の引力は相互の質量の積に正比例し、それぞれの間の距離の自乗に反比例する、という万有引力の法則から、天界と地上界のあらゆる運動を演繹できるように

なったのである。ニュートンの神格化が始まりつつあった。1703年にニュートンは王立協会の会長に選出され、その後、死ぬまでの25年間にわたってその地位にいた。数学や天文学を専攻する青年達は『自然哲学の数学的原理』を新しい啓示とみて、ニュートンの周辺に集まってきた。イングランドとスコットランドの大学地図は、数学と天文学に関する限り、完全にニュートン色にぬり変えられていった。

その理論の当否はともかくとして、社会的影響力に関する限り、彼は自らの強力な論敵達のいずれの者よりもなが生きることによって、最終的な勝利を手中にした。王立協会の初代実験機器管理者を勤め、王立協会の活発な活動の中心人物であったフック（1635～1703）も、自らの膨大な観測結果をニュートンに提供した、初代グリニッジ天文台長を勤めた天文学者のフラムスティード（1646～1719）も、そして、ドイツの哲学者で、ニュートンと独立して微積分法を創案したとされるライプニッツ（1646～1716）も、いずれもニュートンよりも早くこの世を去ることによって、敗北していったのである。

英国民こぞってのニュートン崇拝は危険なものとなりつつあった。ニュートンが第二のアリストテレスとなって、進歩に対する克服し難い障壁が生み出される危険があった。しかし、彼の死後一世紀たって、やっと、人々は彼の権威から自らを解放した。十九世紀に入ると、神格化され理想化されていたニュートン像に衝撃を与えるような著作が相次いで現われた。

二十世紀になると、無謬の体系としてのニュートン理論は、限定された条件の下でのみ妥当するものとして、アインシュタインによって打ち破られた。量子力学の確立はこのことを更に確かなものとした。二十世紀の科学は、絶対的真理の探求を断念したのである。

* * *

ニュートンの考えた宇宙は、一種の時計じかけの宇宙であった。神は宇宙を創造し、重力法則を命じたのである。そして、諸惑星は神の御手によ

って投げ出された。その後は、神の介入は必要でなく、重力法則に従って全てが運行する。全てが一時に為されたのであり、そこには宇宙の進化を考える余地はなかった。

しかし、ニュートンの理論は、他方で、法則の支配という考えを人々の想像力の中にしっかりと根づかせていった。それは当然、現在作用しているのと同じ力がこの宇宙を生み出したのではないか、という構想を生む機縁となる。ラプラス (1749～1827) の星霧説はその典型的なものである。

進化論は天文学の領域で始まった。しかし、それは、地質学や生物学において、一層学問的な重要性を持っている。ビュフォンの (1707～1788) は1749年に、現在の地球上の山や谷は二次的原因に基づくものであり、その同じ原因が、全ての大陸、丘、谷等を破壊し、また、それらに似た他のものを再生する、という説を発表した。ここにいう「二次的原因」とは、神の創造の業以外の全ての原因のことである。正統派にとって、現在我々が見い出すのと同じ丘や谷、また同じ海と陸の分布状態で世界が創造された、と信じるが必要であった。パリのソルボンヌ神学部は、ビュフォンの説は教会の教義に反するものである、と宣告した。ビュフォンは、ソルボンヌとの論争を始めるのは適当でないと考えて、自己の主張を放棄した。

ハットン (1726～1797) は、地質学において、現代的科学的見解を最初に表明した。彼は1788年に、過去に地球の表面で起った変化は現在も作用している原因によるものであり、それが現在より過去においてより活発であったと考える理由は何もない、という説を発表した。

地質学の進歩は、やがて、生物学の進歩とからみ合ってゆく。ラッセルによれば、植物や動物が時の推移と種の変化によって進化したのだという、主として地質学から生物学に受け継がれた説は、三つの部分に区分できる。

- (1) 生命のより単純な形態のものはより古く、より複雑な構造のものは、記録上遅れた段階に初めて現われたという事実。

(2) より後のより高級な有機体は自然に発生したのではなくて、幾度かの変化を受けて初期の形態から生長したものであるという理論。

(3) 進化のメカニズム，即ち，変種と適者生存の原因に関する研究。

最初に包括的な進化の理論を打ち出したのは，フランス人のラマルク（1744～1829）であった。彼は，動物の体に新しい器官が生まれるのは，その動物が新しい必要を感じることに由る，と信じていた。また，その生存中個体によって獲得されたものはその子孫に受け継がれる，と信じていた。ラマルクの進化論は一般に受け入れられなかった。

ダーウィン（1809～1882）は進化をより蓋然的にみせるメカニズム，即ち，自然淘汰の説を提示した。動物や植物の世界では，急速な繁殖のために，各世代の大部分は子孫を残す年齢に達することなく死ななければならない。各々の種の内部においても，また，異なった種相互の間においても，絶えざる闘争が行われ，そこでの敗北は死を意味する。従って，ある種属のある構成員が何らかの点で他のものよりも優れているならば，それだけ彼らはより後まで生き残ることになる。周囲の特別な環境に最もよく適応した変種だけが，生存競争に打ち勝って生きのびることになる。ダーウィンは，動物に突然変異が起り，ある変異は遺伝する，ということを論拠にした。変異の原因は未解決の問題として残された。

ダーウィン説は，コペルニクス説に劣らぬくらい激しい打撃を神学に与えた。新学説がどういふ結果を生むかを感知する点において，神学者達は，新学説の擁護者達よりも，はるかに鋭敏であった。人間は下等な動物の子孫である，と宣言されたのである。ダーウィンは，自分自身が猿みたいだったのでそう信じたのだ，と俗人達は言った。神による宇宙の創造という観念は，既に，ラプラスによって疑惑にさらされていた。今や，それが人間にまで及んだのである。ニュートンの創造の神さえ不必要なように感じられた。神学者達は新学説に対して戦いを挑んだ。しかし，彼らは，もはや，ガリレオに対して得たような勝利を，ダーウィンに対して得ることはできなかった。

*

*

*

コペルニクス理論は、人間を宇宙の中心的位置から転落させた。このことは、人間のプライドを著しく傷つけた。進化論はそれに追い打ちをかけた。本能にのみ従う猿と、不滅の魂を持つ人間の間の、乗り越えることのできない壁が爆破されてしまったのである。

しかし、宗教と哲学は、やがて、進化論に順応し、進化論を新しく解釈し直した。進化とは、神の心の内なる理念の展開である。長い進化のプロセスを経て、最後に人間が生み出された。人類こそ進化のプロセスの最大の果実であり、更に、その将来は栄光に満ちている。こうした考え方は、産業の興隆しつつある時代にはぴったりのものであったろう。進歩への信仰が人々を支配した。かくして、近代科学の登場によって、プライドを傷つけられつつあった人類は、再び、自信を回復したのである。

Ⅳ 哲学の価値

生物学の領域で提示された一仮説を性急に一般化することによって、進化論哲学と呼び得るようなものが生み出された。しかし、生物の歴史から普遍的進歩の法則を引き出す哲学に対しては、二つの反対論がある。まず第一に、生物進化史それ自体が、時間と空間の無限小部分から選出された非常にわずかなものに関する理論であって、科学的根拠からいっても、それが宇宙全体の出来事の平均的事例になる、ということは信じ難い。なぜなら、成長と同様に衰退ということも宇宙の正常な出来事である、ということを知っているからである。

第二に、進化主義の魅力となっている進歩という観念そのもののの中に、不当にも、人間中心主義という倫理的観念が混入されている。確かに、ケプラーの場合がそうであったように、非科学的な先入主が科学の進歩に参与するということが時には起るけれども、それは科学の進歩に対する重大な障害ともなり得るのである。人間の当面の欲望に基づいて宇宙に法則を

押しつけようとすることは、やはり、慎しむべきであろう。

* * *

哲学は、科学の諸結果の性急な一般化に関わり合うのではなく、科学の諸方法を学ばねばならない、とラッセルは言う。つまり、哲学の領域においても、分析が重要になってくる。問題を明確な諸問題に分割し、試験的、部分的、そして継続的に進んでゆくことが必要になる。また、哲学は、全ての有能な学徒が気質に関わりなく同意する諸原理に依拠しなければならない。

こうなると哲学はその性質を大きく変えることになる。科学的哲学は、一つの全体としての宇宙に関する論説や、一つの包括的な体系の樹立をめざさない。この哲学は、世界の、みたところ断片的でごちゃごちゃしている本性を否定する理由はないと信じており、世界を有機的だとみなさない。この哲学は、知識の本姓から全体としての世界の本性を、ドイツ観念論がしようとしたようには、演繹しようとししない。この哲学は、知識を、神秘的な意味や宇宙の重要性を持たない、他のものと同じような自然的事実とみなす。

科学的哲学は、科学の基礎概念を明らかにし、様々な科学を、科学が探求に成功した世界のその断片の単一で包括的な見方の内に、綜合することを狙うだけである。この哲学は、そのかなたにあるものを知らず、無知を知識に変える護符を持たない。それは人間の自尊心にへつらいはしない。

* * *

十七世紀以降、科学の影響力は圧倒的なものであり、何人といえどもそれから完全に逃れることはできない。人間は、科学を受容した上で、それでも尚且つ高貴な生き方をし得るであろうか？神のない自動機械の世界で人はいかに生きれば良いのだろうか？

広大な宇宙の中であって、地球は特別の地位を占めており、また、宇宙

には何らかの目的が存在しており、それが地球と、わけてもその表面に居住する人間と密接に関わり合っている。これは奇妙な見解であり、コペルニクス以来の天文学の知識を知る者には、信じることの困難な見解である。

科学の明らかにしたことはこれだけではない。地球は相当期間居住可能であるが、永遠にそうであるわけではない。我々の周囲の大気は次第に空間に飛び散るだろう。潮汐作用は、地球が常に太陽に向って同じ面を向けさせるようにし、その結果、一方の半球は余りに熱過ぎ、他方の半球は余りに冷た過ぎて、いずれも人間の居住に適さなくなるだろう。月が地球にころがり込むかもしれないし、それが起る前に、太陽が爆発してしまうかもしれない。

こうしたことが起る前に、居住可能な他の天体へ到達するための技術が開発されるかもしれない。しかし、こうなったところで事態が根本的に変わるわけではない。もし、熱力学の第二法則が正しいとすれば、全般的にみて、エネルギーは常により集中した形態から集中度の低い形態へと移行してゆき、結局は、それ以上の変化が不可能なような形態へと全てのものが移行してゆくであろう。生命は、それ以前に死滅しなかったとしても、そうした事態が起った時には死滅せざるを得ない。

こんな結論をもたらす科学を受容して、それでも人間は高貴な生き方を続けられるだろうか？

* * *

科学的な哲学は絶対的な知識の追求を断念する。それは、宇宙に何らかの目的があって、それが人間と密接に関わり合っている、とは信じない。また、熱力学の第二法則を、今のところ、妥当な仮説として受け入れる。それでは、科学的哲学の価値はいかなるところに存在するのだろうか？

この哲学の価値は、その多くを不確実性そのものの内に求めねばならない。哲学と無縁の人は偏見に把われて生涯を送る。世界は明確で有限なも

のになってしまいやすい。ありふれた対象は問題を呼び起すことなく、未知の可能性は輕蔑的に拒否される。ところが、哲学的な思索を始めるや否や、我々は、極く日常的な事物でさえもが、極めて不完全な解答しか与えられないような諸問題へと我々を導いてゆくものである、ということを知る。哲学は、それが提出する疑問に対する確実な解答を与えることはできないが、我々の思考を拡大し、習慣の専制から我々の思考を解放してくれる。事物が何であるかについての我々の確実性の感じは低減するが、事物が何であり得るかという知識は大いに増大する。それは、懐疑の領域に足を踏み入れたことのない人々の独断論を除去する。確かにそれは、我々を住みなれた神話の居心地の良い室内から引きずり出して、我々を外気の冷たさにさらすことによって、我々を身震いさせる。しかし、新鮮な空気は、結局、活気をもたらすのであり、広々とした空間には独自の壮麗さがある。

哲学の価値はこれだけではない。思いめぐらす対象の偉大さは、個人的な狭い目標にとらわれている状態から、人を解放してくれる。人は、頑強な欲望と無力な意志との間の不断の闘争から解放されるのである。哲学生活は平静で自由である。自己主張を放棄した時に、自己の拡大が最も良く達成される。我々は思索において、自己ならざるものから出発し、その偉大さによって自己の境界を拡大する。宇宙の無限性により、それを思索する心は何ほどかその無限性に与かることになるのである。ここに到って、我々の精神は、やがて全ての生命を滅ぼしてしまう必然の法則の支配する宇宙と対等の地位に立てるのである。

本稿は主として、バートランド・ラッセルの下記の著作に依拠して作成されたものである。

1. 津田元一郎訳『宗教から科学へ』, 荒地出版社, 昭和40年 (Religion and Science, 1935)
2. 柿村峻訳『懐疑論』, 角川文庫, 昭和40年 (Sceptical Essays, 1935)
3. 生松敏三訳『哲学入門』, 角川文庫, 昭和40年 (The Problems of Philosophy,

1912)

4. 江森巳之助訳『神秘主義と論理』, みすず書房, 昭和34年 (Mysticism and Logic and other Essays, 1917) —第六章
5. 市井三郎訳『西洋哲学史』, みすず書房, 昭和45年 (History of Western Philosophy, 1946) —近代哲学, 第六章

15C.	1473コペルニクス生まれる	
16C.	1543 コペルニクス死ぬ 1564 ガリレオ生まれる 1571 ケプラー生まれる	1513 マキヤヴェリ『君主論』 1543 コペルニクス『天体の回転について』
17C.	1616 ガリレオ第一宗教裁判 1630 ケプラー死ぬ 1632 ~33ガリレオ第二宗教裁判 1642 ガリレオ死ぬ, ニュートン生まれる	1609 ケプラー『新天文学』(第1・2法則) 1610 ガリレオ『星界の報告』 1619 ケプラー『世界の和声』(第3法則) 1632 ガリレオ『天文対話』 1637 デカルト『方法序説』 1651 ホッブズ『リヴァイアサン』 1687 ニュートン『自然哲学の数学的原理』 1690 ロック『統治論』
18C.	1727 ニュートン死ぬ	1720 ライブニッツ『モノラ論』 1739~40 ヒューム『人間本性論』 1753 ルソー『人間不平等起源論』 1776 スミス『国富論』 1781 カント『純粋理性批判』 1798 マルサス『人口の原理』
19C.	1809 ダーウィン生まれる 1882 ダーウィン死ぬ	1812~16 ヘーゲル『大論理学』 1859 ダーウィン『種の起源』 1867 マルクス『資本論』第1巻